

ティラノサウルス科^{かぞくけいかく}属計画！？

おおしまつはる
大島光春（学芸員）

博物館資料の多くは、学芸員による採集や一般の方々からの寄贈によって充実していきます。しかし、私が担当している恐竜のような大型の脊椎動物化石については、ほとんどの資料を購入しています。限られた予算を、もっとも有効に使うて収集資料を充実させるために、学芸員は作戦を立てます。とはいえ、実物の化石はいつでも市場に流通しているというものではないため、レプリカを購入するなど臨機応変な対処が要求されます。

今、遂行中の作戦はCPFT (Collection Plan of the Family Tyrannosauridae)。ティラノサウルス科^か家族計画ではなくてティラノサウルス科(収集)計画です。恐竜の中でも特に人気があり、博物館の収集活動として賛同を得やすいというのも理由の一つですが、研究活動が活発に行われている分類群であることが最大の理由です。

動物分類学上、ティラノサウルス^{ぞく}というは属(Genus)の名称で、有名な*T. rex*(ティラノサウルス)はその中の1種です。科には1つ以上の属が含まれ、ティラノ

サウルス科の場合、ティラノサウルス属の他、アルバートサウルス属、タルボサウルス属、ダスプレトサウルス属が含まれます(注)。

当館ではこれまでにティラノサウルスの全身骨格と頭骨(共に複製)、アルバートサウルスの頭骨(複製)と歯(実物)、タルボサウルスの頭骨(複製)、ダスプレトサウルスの歯(実物)を収集してきました。つまりティラノサウルス科のすべての属がそろいました。

ダスプレトサウルスの頭骨や、すべて種の歯をそろえるまでCPFTステージ1は続きますが、CPFTステージ2として展示計画を始動します。

【注】分類は、研究する学者によって異なることがあります。ティラノサウルスのなかまでは、例えば、
Tarbosaurus = *Tyrannosaurus* Carpenter, 1992
Gorgosaurus ≠ *Albertosaurus* Curry, 2003
Gorgosaurus = *Albertosaurus* Russell, 1970
Nanotyrannus = *Gorgosaurus* Gilmore, 1946
Nanotyrannus = *T. rex* の若い個体 Carpenter, 1992 とする意見・見解などがあります。



図1 アルバートサウルスの頭骨。



図2 タルボサウルスの頭骨。

収集システムのデータを世界に発信 - GBIF へのデータ提供 -

ひろたにひろこ
広谷浩子（学芸員）

開館当初から整備されてきた情報システムのうち、主軸をなす収集システムは、当館が所蔵する資料のデータベースです。現在18分野約35万件の標本データが登録されています。このデータベースは一部を除き、これまで館内での閲覧しかできませんでしたが、GBIFの事業への参加を通し、今年度より広く一般の方々に公開されることとなりました。

GBIF (地球規模生物多様性情報機構)



図1 整理を待つ哺乳類標本たちは、心なしか所在げなようです。

による1事業として、2005年国立科学博物館を中心に自然史標本データベース=サイエンス・ネットが構築されました。すでに登録館は31団体、標本データ数は約86万件にもなっています。これにより全国の博物館からさまざまな情報が提供されるとともに、生物系の標本について日本全体の横断検索ができるようになりました。たとえば、「ツキノワグマ」と検索すると、ツキノワグマ標本を持つすべての館の標本データが出てくるというものです。これらのデータは、GBIFにも提供されていますので、地球規模での標本データ検索にも入ってきます。

神奈川県内では、当館も含めて6つの博物館が集まり、神奈川県委員会をたちあげ、合計3万件の標本データを提供しまし

た。GBIFの事業をきっかけに、県内の博物館相互の交流も活性化されることを期待しています。今年度は、GBIFの宣伝をかねて、標本情報の公開をテーマとした巡回展示を企画中です。

提供されるデータは、エクセル等の表計算ソフトで簡単にまとめられていれば、加工して共通の形式にすることは容易です。当館の場合も、収集システムにすでに入力されているデータを加工するだけでしたので、比較的簡単な作業だったと思います。

収集システムの調整担当者として憂えるのは、標本データの整備や標本整理の重要性・緊急性についての認識の甘さです。「いつか暇になった時に」と思っていると、標本情報が担当者の記憶の奥底に沈んでしまったり、標本と情報のリンクが切れたりする危険性は非常に高いと思います。GBIFの事業が、誰でもいつでも参照できる形に標本を整理するという博物館の重要な仕事に有効活用されるならば、とてもすばらしいと思います。

た。GBIFの事業をきっかけに、県内の博物館相互の交流も活性化されることを期待しています。今年度は、GBIFの宣伝をかねて、標本情報の公開をテーマとした巡回展示を企画中です。